12月
2020年
みやま
第271号

病院理念
『患者さまの不安をとること』
当院の基本方針
「地域に根ざした安心できる医療」
「精神科医療の充実」
「老人医療」医療と福祉の結合

医療法人社団光生会　平川病院
本年の標語『学びと感謝を常に忘れず　医療に対し誠実な病院　～それが平川病院～』
〔ホームページ〕http://www.hirakawa.or.jp/　〔e-mail〕hhsp1966@violin.ocn.ne.jp

令和2年度 平川病院 新入職者オリエンテーションの様子（令和２年10月27日）

2020年師走になりました

今年の1月は、オリンピックイヤーということで希望に満ちた滑り出しでした。しかし、新型コロナウィルスのパンデミックのため、オリンピックも中止となり、緊急事態宣言、外出自粛など、酷い1年になってしまいました。安倍政権も、トランプ政権も、コロナにやられたといっても過言ではないかもしれません。生活様式は変わり、リモートワーク、ZOOM会議など、オンラインで仕事をすることが短期間で習慣化されました。この1年ほど、当たり前の生活が如何に幸福であるかということを思い知らされた年はないでしょう。そんな中、やっと写真のように11月になって、新人オリエンテーションを行いました。もう半年以上経って、新人というのもおかしいですが、やはり顔を見ながら平川病院のことをわかってもらおうと教育委員会が企画してくれました。厳重な感染防止策の中でしたが、例年以上に、みんな真剣に聞いてくれたように感じ、嬉しく思いました。

「災い転じて福となる」という言葉がありますが、来年は今年できなかったことを心を燃やして挑戦したいと思います。

院長　平川 淳一

【表紙】院長挨拶　【Ｐ２】病棟たより（内科病棟）【Ｐ３】事務室から【Ｐ４】地域生活支援室より
【Ｐ５】入院受け入れの動向～当日・即日入院について～【Ｐ６】依存症の院内研修を開きました
【Ｐ７】栄養科の新メニュー作り【Ｐ８】WEB就職説明会を行いました

内科病棟での新しい取り組み

平川病院の内科病棟は、精神科病院の中にありながら、身体的治療を必要とする様々な疾患（肺炎・心不全・癌・脊髄小脳変性症などの神経難病）を抱えた方が入院しています。地域密着型医療を目指し近隣施設からの入院や、訪問診療にも力を入れています。

私が看護師になり、12年が経ちますが、そのうち8年を平川病院の内科病棟で勤務してきました。日々充実した看護を内科病棟で実践しています。今回、病棟での新しい取り組みについて紹介します。

新型コロナウイルスが世界的に流行し、当院でも面会の制限や、入院時のPCR検査の導入など様々な影響を受けています。内科病棟での看護学生の実習の受け入れもその影響の一つです。今まで当院では精神科領域の実習のみ受け入れていましたが、他の施設で老年期実習を受け入れる事が困難となり、当院で老年期実習も受けることとなりました。

私自身、東京都看護協会の実習指導者研修に参加してはいましたが、実際に実習指導するのは初めてであり、不安を感じましたが、病棟医である河合副院長や土井先生、木下師長を中心に、スタッフそれぞれの持ち前の明るさでスムーズに受け入れることができました。看護学生には病棟内で実習生として孤立し委縮するのではなく、病棟スタッフの一員であると感じてもらえる様な指導を行いました。短い実習期間の中で看護学生は積極的に学習を深め、老年期の特徴や高齢者に及ぼす影響を理解し看護展開し、個別性を尊重した看護の実践をすることができていました。担当患者様の言動で一喜一憂する看護学生の姿を見て、指導に携わることで、子育てをしている感覚で微笑ましく感じたり、昔に四苦八苦しながら様々な事を考えていた学生時代を思い出したりと非常に考えさせられる場面もありました。その中でも私らしく看護学生に関わることができ、自分自身の成長にも繋がったと感じています。実習最終日には看護学生から「楽しく学ぶことができた」という声を聞くことができ、実習指導をする責任の重さの中にも楽しさややりがいを実感しています。

内科病棟全体の反応としても、看護学生と接することで、病棟スタッフ個々の意識も高まり、そのことが患者様により良い看護を提供することに繋がったと感じています。喜ばしいことに、来年度の実習受け入れも決まったので、看護学生に憧れられる看護師像を見せられるよう、スタッフ一丸となってこれからも看護に取り組んでいこうと思います。

内科病棟　看護師　武部 龍太

病棟クラークを経験して

事務室から

私は、医療事務の専門学校を卒業し、病棟クラークとして採用して頂きました。

平川病院では病棟クラークが各病棟に配置されており、医師・看護師が治療に専念できるよう主に事務業務を担当している職種です。病棟クラークが配置されていることにより、医師・看護師の負担が軽減され、本来の診療や看護がより行えるようになります。病棟クラークは患者様と日常的に関わる機会も多く、ご家族の面会受付の対応や案内も行っており、ご家族と顔見知りになることもあります。また事務部やコメディカルの職員、他病棟のクラークと連携しながら業務を遂行しています。

１年半前、看護部長室に呼ばれ、酒井看護部長と和田次長に、学校で学んだこと、クラークで学んだことを生かせるので医事課に行きなさいと背中を押され、異動することになりました。

医事課では受付・会計業務、院外からの外線対応、患者様の負担金の計算をして保険者への診療報酬請求を行うレセプト作成、またカルテ管理やデータ提出加算のデータ打ち込みなど様々な業務を行っています。その中で、医事課の専門性が最も発揮されるものが、診療報酬を請求するレセプト業務です。患者様が病院で診療を受ける場合、保険証を提示して診療を受けます。これを保険診療と呼びます。費用の一部は、負担割合に応じて患者様本人が受診した病院に直接支払い、残りは保険証を交付している保険者が病院に請求を支払う仕組みとなっています。保険者への請求書はレセプトと呼ばれ、医事課での重要な業務になります。当院では、医事課全員で外来を担当し、病棟を各自で２病棟受け持ち、診療費用のレセプト業務を担っています。レセプト記載内容に間違いがあると、審査支払機関から再提出（出し直し）を求められたり、一部請求を減額されてしまうケースもあり、作業の正確性が求められます。

病棟クラークを経験して、電子カルテから情報を得たり、患者様が行った処置・使用した医療材料などイメージできやすく、レセプト作成をする上で大変役立っています。

まだ分からないこともありますが、先輩方の支えもあり、病棟クラークを経験した医事課員としてその強みを生かし、自分が日々携わっている業務を行っていきたいと思います。

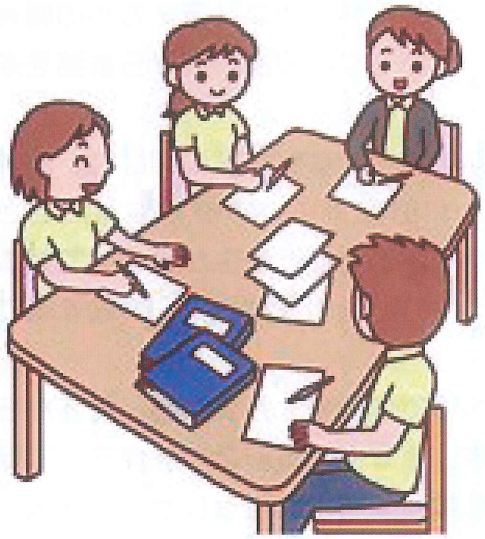
医事課　田中 夏実

病院の取り組みと地域生活支援をつなぐ

地域生活支援室より

先月号でデイケアより、統合失調症の認知機能リハビリテーションの1つとして当院で行っているHCAT－Jを紹介しました。このプログラムは日常生活や就労の課題につながることが必要と言われています。今回の参加者が外来患者様のみだったこともあり、プログラムを進める中で、地域生活支援科も参加し、それぞれの患者様をとりまく生活・就労支援とどのようにつなぐか検討しました。そして、今回終了後、患者様によってはケースカンファレンスを実施しました。ＨＣＡＴ－Ｊの主旨を地域の支援者にお伝えし、プログラムを通して患者様自身で語られた目標や変化、プログラム担当職員の気づきなどをもとに、改めて個々の目標に向かった生活支援の方針や内容を詰めました。プログラムに参加して認知機能が改善する方ばかりではありませんが、地域での支援は個別で行うことも多く、グループで患者様同士のやりとりから生まれるそれぞれの変化を知ることは、個別支援では見えづらい患者様の強みを知る機会にもなり、日々の支援に活用できると思いました。生活・就労支援の中で、新たな支援展開を考えたい時など、このプログラムを効果的に利用できるのではないかと担当職員と話しています。

次回に向け、地域の支援者との連携をプログラム終了後の情報交換という形だけに終わらせず、参加患者様を支援している当院訪問看護、ハローワーク、グループホームなどの職員に、実際にプログラムの過程に参加してもらう準備をすすめています。そうすることで、認知機能に関する患者様自身の目標や、プログラムを通した変化を、生活・就労に反映することができ、逆に地域の支援者から生活・就労に即した情報をいただき、プログラムに生かせることができるのではと期待しています。



今回はHCAT－Jと地域生活支援をつなげる・・というテーマで書かせていただきましたが、病院の他の取り組みについても同様と考えています。病院のさまざまな取り組みを地域の生活（支援）につなげることが私たち地域生活支援科の役目であると自覚し、今後も取り組んでいきたいと思います。

地域生活支援科科長　ソーシャルワーカー　石橋 さおり

入院受け入れの動向～当日・即日入院について～

当院では迅速な相談対応を目指すため、その指標のひとつとして、入院のご依頼をいただいた当日、翌日に入院を受けた件数を「即日・翌日入院」として医療相談科で集計しています。今回の報告では、2018年10月～ 2019年9月までの入院件数643件のうち「当日・翌日入院」と集計した263件（入院件数の約1/3件）について報告します。

当院の入院では、外来診察の結果によるものは263件中81件でもっとも多く、次いで医療機関などに通院や入院している方が精神症状の悪化などにより対応困難となり、医療機関からご相談をいただいたり、東京都の精神科救急の当番や患者様ご本人やご家族などから直接、相談をいただいたりすることが多いです。

入院受け入れ病棟では、南2（精神科治療病棟）、A2（アルコール依存症専門病棟）、内科の3病棟で大多数をしめています。各病棟の役割、特徴により早急な入院受け入の数は差がでますが、「即日・翌日入院」の件数が少ない病棟でも、他の病棟でスムーズに受けられるように患者様の転棟等の移動先としての役割を担うこともあります。スムーズな入院受け入れのために病院全体で取り組んでいると言えます。

相談から入院まで、スムーズな対応をすることは大切です。しかし、患者様やご家族の中には、「精神科に行くのは初めて」と不安なお気持ちになる方もいらっしゃいます。早急な対応と同時に、事情の許す限り患者様や家族の気持ちに寄り添い精神科や当院の治療、療養について情報提供することで、その後の予後も大きく左右されます。家族、関係者のみなさまと連絡を密にしながらより良い対応を心がけています。

平川病院　医療の質向上促進委員会

依存症の院内研修を開きました

近年、依存症に関する理論は急速な発展を遂げています。特にホットなのは、従来、依存症の診断基準は物質（アルコールや違法薬物など）が対象だったところ、ゲームやインターネット、ギャンブル等の行動（行動嗜癖）も依存症の診断基準に含まれるようになってきたことでしょうか？ ゲームでガチャを引くため親のお金を浪費したり、競馬にハマって多額の借金を抱えたりなど、行動嗜癖の社会的、経済的な影響は物質依存に匹敵するほど深刻です。平川病院では長らくアルコール依存症の専門治療を行なってきておりますが、一方で行動嗜癖に対する治療体制はまだ整っておりません。当院の依存症治療の発展のためには、職員間で依存症に関する最新の理解を共有する必要があると感じ、院内研修を計画しました。どんな内容を話すか整理するため、私の所属する心理療法科内で定期的に勉強会を開き、依存症に関する知識を蓄積しました。それから依存とは何か整理し、対象の異なる依存に関する知見の中から主に共通点と相違点をまとめ、院内研修で紹介しました。研修の内容については大切なところだけを抜粋して紹介させていただきます。

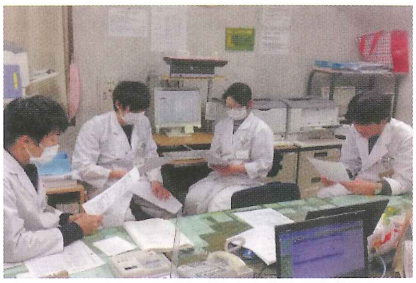
物質依存との行動嗜癖の明確な違いは、前者には依存する対象が物質であること、そして後者はその対象が物質ではないことです。しかしながら、どちらも脳の報酬系において依存が形成される点で共通しています。また、依存症になると、物質・非物質に関係なく離脱症状が現れます。離脱症状とはその行動が行えない時に生じる不快感を指します。たとえば、アルコール依存の人がいきなりお酒を止めるとイライラしやすくなったり、ゲーム依存の人がゲームを取り上げられると暴れたしたりすることは離脱症状と言っていいでしょう。

依存する対象は違っても依存の仕方には共通点があるのなら、治療方法にも共通点があるはずです。従来より、物質依存の人にはミーティングが重要とされてきました。当事者同士が集まり、正直に自分の体験や思いを語り合う体験は、行動嗜癖の方であっても効果があると思われます。今回の院内研修を皮切りに、依存症治療に関わるスタッフとともに、平川病院の依存症治療体制を充実させていきたいと思います。

心理療法科　公認心理師　内田 竜人

栄養科の新メニュー作り

今回は栄養科で新メニューを作成する流れを紹介します！

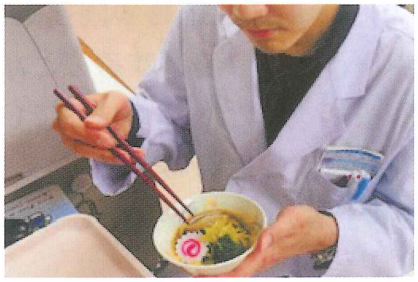


①新ﾒﾆｭｰを決めます！

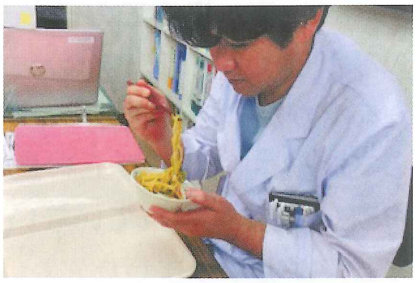
②材料を選びます！
（咀嚼・嚥下も考慮します！）

③調味料を選びます！
（味の決め手！かなり重要です！）

④試作です！



⑤試食します！



⑥青木科長の試食・判定！
（合格です！やった～！）

⑦献立ソフトに入力します！

⑧厨房ｽﾀｯﾌと打ち合わせです！

⑨新ﾒﾆｭｰはｶﾚｰﾗｰﾒﾝでした！
（患者様にも大好評でした！）

開院以来、直営厨房の利点を活かしてシームレスな栄養管理を実践しています！

来年は、毎月新メニューの提供や「郷土料理・日本味めぐり2021」を企画しています。乞うご期待！！

栄養科　主任　管理栄養士　田中 康之

WEB就職説明会を行いました

現在、コロナ禍により、就職活動も大きな制限を受けております。病院としての求人活動も影響を受けており、就職説明会等については、オンライン化の流れになっています。リハビリテーション科は、春よりオンラインに切り替え、就職説明会を行ってきましたが、今回、病院全体としての就職説明会を企画し、多職種合同の就職説明会を開催するに至りました。

Facebookページを作ったり、学校等にアナウンスしたり、段取り等を確認したり、パワーポイントで説明用資料を作成したり、院長、看護部長、村田診療協力次長には、ウェルカムスピーチの撮影にも協力して頂きました。

なにしろ、初めてのことも多かったので、確認や調整をたくさん必要とし、バタバタとしながら準備を行いましたが、当日、無事に終了することができました。

応募があって実施をしたのは医療相談科と心理療法科で合計6名の方々でした。説明者として、荻生科長、淵上科長をはじめとした両科のスタッフが参加しました。特に、まだWEBの操作に慣れていない荻生科長はかなり緊張しており、終わった時には解放感あふれる歓声が上がりました。

コロナウイルスは、この1年で本当に大きく社会を変えました。オンライン化の流れは、今後も止まることなく、進んでいくと思います。患者さんと家族の面会もWEB面会になり、研修会や学会、イベント等についても、オンライン開催が当たり前になりました。

平川病院では、今回の就職説明会についても、募集をしている、いないに関わらず、前向きに変化に対応すべく、スタッフが勉強をしていっています。

変化をすることは大変ですが、前向きに取り組むと非常に楽しいことでもあります。最終的には、それは進化になると考え、進んでいきたいと思います。

多職種合同就職説明会　担当
リハビリテーション科　科長　上薗紗映

編集後記

今年の流行語大賞「三密」に続き、今年の漢字もやはり「密」でした。感染下で様々な自粛を求められ、理由のひとつに大切な人との関係が「密」接になり、人とのつながりの大切さを再認識する機会になったということは、ひとつの救いであろうか。来年の今頃は新型コロナ感染が終息していることを願い・・・。今年も「みやま」をご愛顧頂きありがとうございました。

編集委員一同

医療法人社団光生会 平川病院
東京都八王子市美山町１０７６
電 話 ０４２－６５１－３１３１
FAX ０４２－６５１－３１３３
編集　平川病院　広報委員会
ご意見ご感想はこちらへお願いします
kouhou@hhsp1966.jp

HIRAKAWA HOSPITAL